

歌人探訪



河野愛子

河野愛子

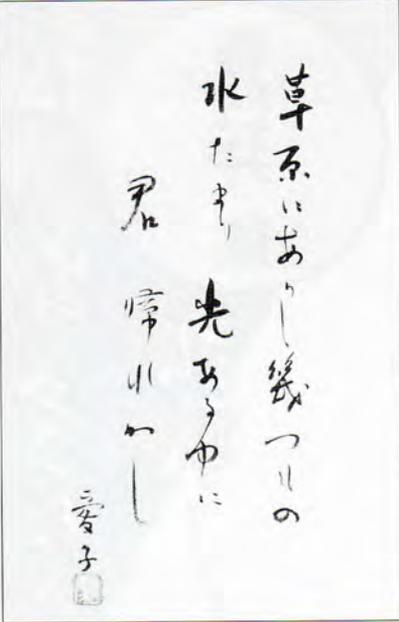
中川佐和子

草原にありし幾つもの水たまり光ある中に君帰れかし

『木の間の道』

この歌は、^{こうのあいこ}河野愛子が昭和二十四年「アララギ」七月号に発表した歌で、昭和三十年刊行の『木の間の道』の一首です。とても純な心の動きが伝わります。

結核が悪化して昭和二十三年から数年間、千葉市郊外の国立療養



直筆色紙

所千城園に入院しました。入院した年の春には、病勢がかなり進んでいて手術不能で余命三年の診断でしたが、少しずつ持ち直してきていました。療養所まで逢いに来てくれた夫を頼りにして恋う気持ちと、「光ある中に君帰れかし」と祈りにも似た思いがなんとも言えず痛切です。

この歌には、深く病むことによって多くのことを断念せねばならない寂しさがうかがえます。そして、死への恐れを克服しようとすることは大きな試練でしたが、諦念とほのかな明るさが歌にあり、河野がずっとその後も持ち続けたものでした。昭和二十九年には無教会派のキリスト教の洗礼を受けました。キリ



愛子(15歳)、妹・恭子(6歳)(昭和11年正月)

スト教の教えを学びつつ、いつの頃からか、生きることは、生き残ることであるという死生観を自ずと持つようになりました。そういうところを原点にして、ほかの歌人と大きく異なっていたところでは、この歌の「光ある中に」という言葉に、河野はとても心惹かれ、のちにいずれかの歌集の題と考えていた生前の思いを汲んで、遺歌集の題に付けられました。

河野は、大正十一年に軍人であった父の最初の任地栃木県宇都宮市に長女として生まれました。そして、昭和という時代をまるまる生き抜いて、平成元年八月九日に東京築地の国立がんセンターにおいて、六十六歳でその生涯を終えました。

河野の短歌との出会いは、昭和十年に入学したアメリカ、メソヂスト派のミッションスクール広島女学院高等女学部の時に溯ります。昭和十四年の夏、両側湿性肋膜炎を病み、この頃、国語教師で歌誌「高嶺」の同人岡辺茂子氏から作歌を勧められ、指導を受けました。

『木の間の道』以前の歌は、初期歌篇「ほのかなる孤独」として『河野愛子歌集一九四〇〜七七』（沖積舎刊行）に収録しています。

歌集中の「口元に手をやるたびに袖口の白きレエスがこころよかりき」のように若さが持っている感傷性を自覚しつつ、伸びやかに歌っています。そういった時期を経て、敗戦を迎えました。歌の出發に胸を病むことがあり、敗戦と同じく、

20歳のころ



河野愛子

かなり若い頃より生きることの意味と向き合っただと言えます。

八月十七日参謀本部に夫をたづねひと度は死にゆく君と思ひき

『木の間の道』

塵の如き命を夫と吾生きて生きの行方の
いまだ定まらず

ベッドの上にひとときバラソルを掘げつ
つ癒ゆる日あれな唯一人の為め

『木の間の道』には、昭和十七年から三十年までの作品を収録しています。昭和十八年陸大学生と結婚し、昭和二十一年に復員した夫と千葉市に住みました。

例えばここにあげた一首目の歌などを見ますと、河野の個性がよく出ています。敗戦直後の東京の街に、病身をおして夫に会いにゆきました。軍参謀の教育を参謀本部で受けている筈の夫とついに会えませんでした。戦争中は軍人の夫の死を一度は思い定めながらも、湿潤とならず清潔な感性を発揮した点などに、河野が資質として、当初から持っていた客観的なまなざしをみる事ができます。

地の上に営む限り性あれば夜々あはれみ
昆虫記読む

『木の間の道』

もうひとつ、この第一歌集で見えておきたいところがあります。河野は、相聞を歌の主題にずっとしていましたが、この歌の「地の上に営む限り性あれば」という「性」の捉らえ方の、当時の時代の中での新しさと鋭さに注目すべきでしょう。生きることを性の側から切り開いてみせたのは、戦後の女性の歌人としての短歌の新しきで

した。こういうところに河野の個性があります。

昭和二十一年に「アララギ」に入会した河野は、土屋文明や近藤芳美に大きな影響を受け、終生変わらぬ信頼を寄せました。近藤は、昭和二十三年二月に第一歌集『早春歌』、第二歌集『埃吹く街』をほとんど同時に刊行して、戦争時とまた戦後を生きる青年の新しい感性での表現に、特に若い世代の注目を集めていました。河野は、近藤について当時は振り返り「青春を戦争に葬りさった者の傷痕からの出発に際し、清潔で知的な慰めのリリシズムに光っていた」（昭和五十五年「未来」十二月号に掲載）と書いて深く敬愛していました。「アララギ」の土屋文明の選歌を受けつつ、関東アララギ会編集誌「新泉」においての近藤芳美の選歌で学ぶ時期を経て、昭和二十六年に近藤を中心として創刊となった短歌誌「未来」に当時結核の療養所に居た河野も加わりました。

れんぎやうのひとかたまりの黄の色はさ
だまりてゆく月の光に

『草の翳りに』



箱根にて、妹の家族と（昭和30年ごろ）

触角の如く怖れにみちてゐる今日の心と
書きしるすのみ

昭和四十年代に第二歌集『草の翳りに』と第三歌集『魚文光』を刊行しました。昭和三十年代では、河野は療養所から退院したとはいえ、自宅で安静時間を守つての生活で外出を控えていました。しかし、昭和三十年代の前衛短歌運動の中でも、短歌の可能性と個の内面を探求する岡井隆の短歌への挑戦に強い影響を受けました。『草の翳りに』の後半あたりから、表現に飛躍がみえてきました。

心のまにま乱れつつをりしのみワイニン
ゲルを今日取出だす

『魚文光』

男の死女の死そのつひの舌の凍ゆる闇を
思ひつめつも

手の上に臍さだめなき形なす一人の生も
又あるがまま

『魚文光』は、河野の転換期にあたります。心の内側を描き出す点において、河野は、「アララギ」の従来のリアリズムの表現だけでは掬いきれない何かを掴もうとして、歌がかなり変貌を遂げていきました。岡井が、与えた影響は河野にとって決定的なものでした。岡井の歌集『眼底紀行』についての河野の批評文「ひとりのみち」（昭和四十三年「未来」一月号に掲載）では、「静穏な心で読むことのできない本であった。」で始まり「困難な孤りの道をあゆむこのすぐれた歌人、力ある男性であることへの信頼と評価のおもいを、私

は私なりに新しく確かめた。」と記し、また岡井の歌集『鶯卵亭』についての批評文「私状況を武器として」(昭和五十一年「未来」四月号に掲載)では、身辺に岡井隆が存在しなければ、短歌のみならず芸術の創造活動について、特に前衛の意味の重さと価値を全く理解出来なかつただろうと述べています。当然にして表現方法の意識が一層深まっています。

河野には、『木の間の道』(昭和三十年白玉書房刊)、

『草の翳りに』(昭和四十一年新星書房刊)、『魚文光』(昭和四十七年思潮社刊)、『鳥眉』(昭和五十二年短歌新聞社刊)、『黒羅』(昭和五十八年不識書院刊)、『反花篇』(昭和六十一年短歌新聞社刊)、『夜は流れる』(昭和六十二年不識書院刊)、遺歌集『光ある中に』(平成元年不識書院刊)の八冊の歌集があります。大きく捉えれば、女性の鋭敏な感性で、生きることと深く見つめて、「いのち」を歌いました。生きることの混沌を、自身の内側に引き寄せ、とても清澄な抒情の歌を歌いつつ、その一方でかなりぎりぎりのところで、生きることの深淵を覗き込んでいます。そして、河野の場合、子を持つ



妹、恭子(左)と(フランス・ヴェルサイユ宮殿の庭・昭和54年)

河野愛子

たなかつたゆえに、自らに向ける視線の厳しさが増したように思います。また、梓に嵌まらない悪戯っ子のようなどころがあり、気品を保ちつつ奔放な一面を持っています。河野は、「生きること」を歌うのに、ずっと、〈女性〉の視点を手放しませんでした。

胡桃のたねの脳に似たるを手にとりて見て
るたるなり夜のふかきに

『鳥眉』

遂げよとて空のまほらを行く鳥は小さく
赤き日に入りゆけり

子をなさず一人あるままの生き方も光と
散りゆくえこの白花

『鳥眉』は、一頁に歌一首を載せて、つまり一首組で五年間の作品百六十五首を収めています。その中には連作も含まれていて、連作にも歌一首の自立を意図しました。歌集の後書きに「私はうたうことが——ことばにかかわることが、いままでになく心重いことに思われた。ことばが、不意にどうにもならぬつめたさをもって私に迫ってくるのだった。(略)その故に又、いいがたく愛執をふかめるに足るものであるといま、考える。」と述べています。歌集中には、村上一郎や「未来」の仲間の原田薫子など親しい人々の死を悼み、「瞼のうらを舌もて探れば吾が恋の屍はほろばると天翔けるらむ」など、歌の裏側には、こういう生きる苦しさに虚しさがひつたりと添っていました。それは、やはり生の自己認識の強さゆえの苦しみだったのでしょう。

羅は黒きゆるる肌のかなしみを得べきとや
巴里の夜の更けにけり

『黒羅』

澄む秋は黒きペロアの襯衣を着て刃物の
並ぶところ過ぎれり

鎮まらぬたましひわれや風の夜の木立に
かかるむらさきの月

巷に電話あふれたりけり夥しき人間の耳
そらに咲きつげり

第五歌集『黒羅』から引用しました。歌集の題名からもわかるように、河野にとって、黒という色から立ち上がってくるイメージは、かなり大切なもので、黒という色は心の有り様をあらわし、精神の深いところまで切り込んでいっています。そういう、「黒」の世界を河野は持っていました。黒のその根底にあるのは、さびさびとした独



現代短歌女流賞受賞式（昭和59年）

りの寂しさであり、生きている人間がもともと抱えこんでいる孤独感であり、華やかな悲哀です。

この歌集になっていっさいを虚しいものとして見つめる醒めた目があり、人生の深淵を覗き込んだ人間としての悲しみに溢れています。避けようのない情念の凄さにぶつかって孤独を吐き出し、カオスを抱え込みながら歌の世界を広げました。そして、抒情のやわらかな手触りと鋭さがこの歌集にあり、河野のひとつの到達点となっています。

『木の間の道』からの流れをみますと、生き抜くことの切実さがあつたところから徐々に河野の主題である「死」や「相聞」や「エロス」が、線の太いものとなっていききました。それは遺歌集『光ある中に』まで脈々と流れ、華やぎがありつつ、生きて行く上での苦しさや寂しさが歌に張り付いています。執心の深さや情念の世界が、孤独な精神の高みまで到達しています。

昭和五十七年に短歌研究賞を受賞。同年に既刊四歌集に未刊の初期歌篇を加えて『河野愛子歌集一九四〇―七七』を刊行。昭和五十八年刊行の『黒羅』により第八回現代短歌女流賞を受賞。まさに、実りある時期でした。

私が、河野の歌と出会ったのは、昭和五十年代の半ばで、師としての河野自身に直接会うことが出来たのは、それから何年かたってからです。その時の印象は、ともかく華やかで、洋服のセンスのよさと茶目っ気があり、言葉の切っ先の鋭さが魅力でした。

言ひとつペルソナとなる 自らの破れを
この夜歎きながらに

『反花篇』



歌集『夜は流れる』刊行後（昭和63年）

魚けもの人も淋しき春の血を溜めてねむ
らむ夜空がひらく
若きらのわんわん屯る酒場所に一詩語死
語となるを遊しむ
ひとつづつわが生の閉ぢてゆく気配大い
なり天の夕焼の色
われ短歌に吐きけもよほすことありつた
んかを切りて去ることもせず

『夜は流れる』

第六歌集『反花篇』から第七歌集『夜は流れる』になるにつれて、ますます歌い方が自在になってきます。『夜は流れる』には、世の中の軽さというのを斜めに見ながら、また若者の奔放さを楽しむ余裕があります。「かたさけふくろ」という言葉による遊び心のある「言葉遊相聞」という歌も入っています。「若きらのわんわん屯る酒場所」など好奇心の強さが、いきいきとしていて、時代の表現である口語を取り入れて、表現にとっても敏感な一面をこういう

河野愛子

ところにも覗かせています。

冥福といふ福いかに あつまりてほのと
笑むらむたましひの色

『光ある中に』

点滴のレモンイエローはわがかつて愛せし服の色かと思ふ

肉叢は死にはんなりとひつそりと水のくちびるを受けやしぬらむ

『光ある中に』の川口美根子の跋文ばつぽんによれば、最後のうたは平成元年八月四日の制作ということでした。ガンの告知は受けていて、「死」を具体的に自らの死として認識して受容せざるを得ないというのが、痛々しいかぎりです。最後まで歌い続けたということに、短歌にかけた人生であったことを考えさせられます。

河野愛子は、女性としての繊細な感性が際だっていた歌人で、女性のとても柔らかな感情を描き出し、その心理描写の鋭さに個性がありました。河野愛子らしきというのは、純な詩精神を終生持ち続け、生きていく上での自らのさまざまな心の葛藤かつらうを思索する一面と、歌に広がり求めて短歌という詩形にさまざまな試みをした所にあります。言葉を置き換えて言えば、「へ生きたとは何か」に常に直面せざるを得ず、ひとりの女性として繊細で純な感性で「へいのち」をずっと歌い続けたといえるのでしょう。六十歳半ばで命が尽きたことが、本当に惜しい歌人でした。

（なかがわ・さわこ「未来」編集委員）